昭和二十七年三月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
（通第三十六号）

慈光

第四卷　第三號

目次

人類救済の曙光（承前）……花田正夫（1）
人生の帰趣と現実……白井成允（6）
聞光抄（秋光の部）……清水清吉（11）

人類救濟の曙光（承前）

花田正夫

四、阿闍世王の爲に涅槃に入らず

大逆の阿闍世も遂に大懺悔に入り「我を救ひ得る者なし、地獄の苦熱は近づけり」と転々懊悩して全身に瘡を生ずる。幸に善友耆婆の慰問をうけ「大王の病を治し罪を救ひ得るは唯佛陀一人であります」と懇ろに勧めるが罪重き者が尊き佛前に出られない」と、大王は卑屈に落さて動かうとしない。この悲歎は求道の途上に誰しも行き悩む大きな問題である。その時亡き父王の声が空中から響いて「佛陀を除いて救ふ人なし、佛はすでに涅槃の雲に入らんとせられてゐる」と勧める。大王の全身わなわなと震ひ、遂に地に悶絶するのである。以上が涅槃経の梵行品第四であるが、次に第五に、天眼を以て遙かに大王の姿をみそなはす佛心を先づ説かれてゐる。

この時に世尊は娑羅雙樹の間に在して、阿闍世王の悶絶して地に倒れるのを見給うて、即ち大衆に「我、今まさに是の王の爲に世に住し、未来永劫に涅槃に入らざるべし」と告げられる。

佛陀は既に入滅の地、雙樹林に移られ、多くの弟子に護られて居られる。その時、阿闍世の苦悩をみそなはされて、是の王を救ひ遂げずば何時までも涅槃に入らないとの大悲心を大衆にもらされるのである。

すると迦葉菩薩が「世尊、何故ひとり阿闍世の爲にのみせられますか」とお尋ねする。といふのも佛弟子達が次から次にと如来に「此世に止まり給へ」とお願ひ申したが、それには何の御返事もなさらずに、耆婆に導びかれつつある阿闍世をみそなはして「阿闍世の爲に涅槃に入らず」と待ち給ふのが腑におちぬのである。

佛陀はこれに答へ給ふに「此所に集る大衆はすでに信眼がひらけてゐるから一人として永劫の別れと思ふ者はない。独り阿闍世のみは永劫の別れと思うて悶絶して地に倒れたのである、だから王の爲に涅槃に入ることは出来ない」と。更に佛陀は「阿闍世の爲といふのは一切の凡夫、五逆の罪を犯す衆生の爲である。阿闍世といふのは煩悩具足の凡夫のことであり、佛性を見ることの出来ぬ者、迷ひ惑うて佛道を、求めようとしない者の爲である。さう言ふ一切苦悩の衆生を浄土

に導いて大涅槃に安住せしめる爲である」と教へられる。

この金言によつて、人類永遠の暗夜に、佛陀無限の慈悲の曙光が射しそめるのである。阿闍世のために涅槃に入り給はぬ佛陀無窮の大悲が、そのまま我等煩悩具足の身に徹到して参るのである。名利の大山に迷惑し、愛欲の広海に沈没して、生ける日の限りをつくして無窮流転し、愈々死に直面しては、「名残り惜しく思へども娑婆の縁つきて力なくして終る」その最後の一刹那まで、ことに憐れみ給ふ大悲の宣言である。

五、月愛三昧のひかり

佛陀は前述のやうに迦葉菩薩の問ひにこたへ給ふと、そのまゝ阿闍世のために月愛三昧に入られ、大光明を放たれると、其の光が清涼であつて、王の身を照らし、不思議にも身の瘡が癒えて苦熱が消え去り、王は非常にすがすがしい心になつた。王は驚喜の餘り「此の光何れより来るや」と耆婆に尋ねる。大臣は「この光明は佛陀が月愛三昧に入られて放ち給ふ不思議の光であります。恰も月光が清涼の光を放つと苦熱にあえぐ者が涼味を得、旅人に夜道を照らし、夕顔や月見草の花を開かしめると同様に、衆生に道を求める心を開かしめ、道行く衆生を照らし護り、煩悩を漸々に滅し、善心を生ぜしめて下さるのであります。然し今放たれて居る光明は大王の爲であります。大王は先に、この病苦を治する良医はないと思ひこんでゐられるから、佛は先づ光を放たれて身の病を治し、更に心の苦をおさめようとされてゐるのであります」とお答へする。

近角先生は御自身の体験の上から「我々が重病になつてそれが恢復すると、医学の力であると思ふが、これは常識的な考へ方で、信仰の上からは佛陀の月愛三昧の力と味ふべきである」と懺悔録に述べられてゐる。このことは先生の驚くべき卓見であられると信ずる。医学は老小善悪の人を簡ばず、力の限り人々の生命を護り続けるのであるが、これを世間の相対善悪の見地からのみ考へると、往々にしてそのことの善悪が不明になる。然し「生命は法の宝」と昔から言はれてゐるやうに、何如なる人も真実のみのりに遭ひさへすれば、境遇の如何、人の善悪を問はず、必ず人間に生れたことを喜ぶ道が開かれる。それには善悪是非を超えて、生命そのものが大切なことになる。だから法の宝としての生命を、是非善悪の妄分別を超えて、最後の一刹那まで護り抜く所に真の医師の使命がある。即ち佛陀の放たれる月愛三昧の光明と一味にとけてこそ医の道が不滅の意義を持つのである。医学の道がすでにさうであるから、病者の生命が医学の力で支へられてゐるといふことがすでに月愛三昧の光明の照護を蒙つてゐると味ふのが自然である。

さて月愛三世の光に浴して、王の罪業に堅く塞された心が

ゆるみかける。「耆婆、如来世尊も亦我を念じ給ふや」と王は大臣に問うた。何たる不思議、何たる驚異であらうか。自分の様な大悪人は世間に誰一人として救うて呉れる者はない、自らの罪業にひかれて無間地獄に唯ひとり墮ちる外はないと、暗黒界裡に孤立無援の身と思ひこんでゐた阿闍世の心がひらかれ始めたのである。自分の様な者をも世尊はお心にかけて下さるであらうかと耆婆につぶやくのである。

耆婆はこの声に応じて「大王、譬へば七人の子を持つ親の心は平等でありますが、其のうち一人の子が重病になると、親の心はひとへに病む子の上に注がれます。佛陀の御心もその通りに、諸の衆生に平等一味でありますが、罪を犯す者、放逸に流れる者をひとへに憐れみ、悲しみ給ふのであります」とよろこび答へる。

王の心は漸く動き始めたもののまたしても深い疑網に蠱らされて行く。王はそこで「自分は斯う聞いてゐる。世尊は悪人と同じく住み語られるといふことはない、それは大海は死屍を宿さず、天人が鬼と共に住まぬと同様である。若し我の如き悪人が佛辺に近づけば大地が裂けて陥入するであらう。自分が思ふに世尊は獅子や虎狼や猛火に近づかれても重悪の者に接近せられるはづがない。それに相違ないことであるから自分の様な重悪人がどうして佛陀を拝することが出来ようか」と疑怯退心する。

相対五分五分の妄分別しかない我々は、この距て心が無限に繰り返されるのである。こちらが善くすれば相手も善くして呉れる、こちらが悪くすれば相手も悪くする。だからこちらが悪いのに向ふが何処までもよくして下さると言ふことは地上世間には有り得ないことである。これが微塵も真実心のない人間世界の究極である。それから一歩も出ることが出来ぬのである。親鸞聖人が「一切群生海、無始よりこのかた、今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清淨の心なく、虚仮諂偽にして眞実の心なし」と観破せられた所である。はてしない昔から穢れ汚れて、微塵の眞実心なく露ほどの清淨心もないのである。だから清淨眞実の佛の御心を疑うてやまぬ、受け取ることが出来ないのである。深く重い罪障に纏綿として縛られて一分一厘身動きのならぬ我等の実相である。智慧第一と称せられた法念聖人の四十三歳の御悲歎、「経典を披覧するに我が智くらく、行法を修習するに我が機すべて及び難し、暗夜に道を迷ふが如く、渡るに船を失ふが如し」との言葉がここに思ひ出されて来る。

六、切々たる善友の悲語

耆婆は、王の心が動きかけるかと見えたのも束の間でまたしても退転して行くのを悲しんで「大王、譬へば渇する者の速に清泉に赴き、饑えたる者の食を求め、病者の医を求め、寒者の衣を求めるやうに、大王も亦今佛を求めて下さい。佛陀は断善根の衆生である闡提にも法を説き聞かせてゐられます。大王は既に因果も信じ懺悔の心を起されてゐられるのでありますから、佛陀は必ず大慈悲を注いで救済して下さるに

相違ありません」と勧める。すると王は耆婆の闡提といふ言葉にひつかかつて「耆婆、自分は昔聞いてゐるが、闡提とは、信ずることもなく、聞かうともせず、物事をよく観察もせず、道理もわからぬ者であると、それなのに佛陀はその者の爲に法を何故説かれるのであるか。それは全く無駄事ではないか」と問ひ返してゐる。耆婆はこれに答へて「あらゆる人からも見離された瀕死の重病人をも、慈悲深い名医は捨てることなく、何処にか助かるよすがは無いものかと最後の最後まで細心の注意をもつて見護るやうに、佛陀は闡提をも深く広く微細に観察せられて、過去にすこしの善があればそれをよすがとし、現在何の手掛りがなくとも未来への佛縁が結ばれるやうにと、深淵に落ちようとする者を髪を捉へて救ひ出すやうに、三悪道に墮する衆生にあらゆる救ひの手を延べられて法を説かれます」と言上する。

私は是処に善星比丘の物語を想ひ浮べる。善星比丘は佛の子であり佛の弟子であつた。佛の子とは佛が一切衆生を一子の如く憐憫されるからである、然し善星は後に佛に叛き、道を捨てて断善根の衆生となつた。そして自らの罪によつて遂に地獄に落ちた。佛はこの善星をみそなはされて、地獄の苦悩をよく知ろし召され乍らも、善星と共に地獄に入られる。すると善星は日夜に続く地獄の苦悩にたまりかねて、ホツト一息つぐ間でも苦から逃れられないものかと切に願つた。その時、善星の側に火焔に包まれて立ち給ふ佛陀の御姿を仰ぎ地獄の底にまで佛の御涙の注がれてゐることを知り、始めて佛心によみがへらされたと言ふ物語である。信ずる者は天国に迎へ、信ぜざる者は煉獄におとすといふ裁きの宗教は、我等の相対智ではよく理解出来る。剣か然らずんばコーランかと叫ぶマホメットは勇ましい、然し地獄の中にまで身を捨てて救済の慈手を飽く迄も延べて下さる無限の大悲は世に見ることも聞くことも出来ない。枯木に花は咲かず煎り豆に芽の出る例はない。然るに断善根の衆生の上に広大無辺の佛慈は、縁を結び劫を重ねて下さるのである、そこに遂には枯木に花が開き、煎り豆に芽が出るのである、これ全く不思議の佛智のひとり然らしめるところである。「仰ぐべし、信ずべし」と申すより外言ひあらはしやうのない眞実である。誘法、闡提の徒の廻心せしめられる秘鍵はここに存する。

七、王車遂に佛所に向ふ

阿闍世王としては未だ半信半疑であるが、救ひの道の絶えてない身として、遂に確信の満ちた善友耆婆の信力にひかれる。そこで「耆婆、佛陀が汝の言ふ通りであれば兎に角佛所に詣でよう。然し今日は日が悪いから明日の吉日を待たう」と王は告げる。大臣は声を励まして「大王、重病人が良医を求めるには良日も凶日もありません。大王今病重く佛陀の良医を求めるのに良日凶日を選ぶことはありません。元来吉日とか凶日といふのは人間の心の暗さが持つ恐怖心の幻であります。今これから佛所に参りませう、佛陀にお会ひ下されば

何事も明らかになることであります」と申し上げる。

この問答は、信仰問題の一大事であることを教へられ、自分でもさう思ひ乍らも、眞劍にその方に向くことの出来ぬ、くだらぬことの方に心が散つて了ふ我等の姿を自照せしめられる。猫の前で小判を見せる、猫は一寸その方に眼を向けるがすぐまた他所の方に注意は散つて了ふ、何度繰り返しても同じである。大經に設ひ三千世界に滿てらん火をも過き行きて、佛の御名を聞けと訓へられてゐるが、我等煩惱に盲ひた者は、底のない愚鈍さから脱することが出来ないのである。善友の悲心はここに注がれてやまぬのである。

耆婆の悲心は遂に王を動かせた。早速王は吉祥大臣を呼び「大臣当に知るべし、我今佛世尊のみもとに詣でん、速に供養の品をととのへよ」と命ずる。斯くて大王の行列を整へ、一切の供養の宝物を滿載して、遙かに佛所に向つて王の行列は進むのである

雙樹林下の佛陀は王舍城を出発する阿闍世の大行列を遙見せられて「一切衆生の佛道を成ずる近因縁は善友に勝る者はない。若し阿闍世が耆婆の勧めに遭はなければ、日ならずして悶死して永く地獄に沈むであらう」と大衆の前に善友の德を讃へられてゐる。

眞の知識に遭ふことは難きが中になほ難しとは、聖人が生涯を通じられての慶喜の声であつた。然も真の知識とは己を空しくして一路佛慈の無窮を指し悲引やむことなき方である、耆婆大臣が現にその通りを実行せられてゐる。そこに佛陀の讃歎がある。

大王の行列は進んで行くがその途中に「舍衞城のビルリ王は釈迦族を亡ぼして程なく海で船火事に遇うて死んだ。提婆達多の弟子は生きながら地が裂けて地獄に落ちた。好星は種々の悪を作つたが佛所に詣でて救はれた」といふ種々の物語を王は聞かれると急に怖ろしくなり「耆婆も共に象に乘れ、若し途中で地が裂けても汝はすでに道を得てゐるから地獄に落ちることはあるまい。その時自分を捉へて地獄に落さないやうにせよ」と耆婆に頼むのである。

実に溺れる者は藁をも掴む、疑情去り難い王は善友耆婆にしがみついて離されぬのである。病苦に喘ぐ子供が枕元から母親を離さぬと同様である、罪悪と無常におののく阿闍世の悲哀である。「人に依らず法に依れ」と言ふ誡めがあるが、真実の大法に徹し得ない間は善友のみに執着し偶像化して行かずには居られないのである。

其の時佛陀は、阿闍世の心中の悲哀を憐れみ給うて「一切は無常で定相はない。阿闍世は已が作る罪に実体あるかの如く悩んで、そのために疑情が去り難いのである。然し我はすでに阿闍世の疑情を破壞し得ることを決定してゐる」と大衆に告げられてゐる。

このことは誠に有難い御言葉である。譬へは重病人が名医を訪づれる時、病者の心は恐怖に滿ちてゐる。その時名医から「必ず治ります」と聞かされたらどんなに嬉しいことであらうか。さあどうなるか、兎に角やつて見よう」では安心は出来ない。佛陀はすでに阿闍世の罪業と疑情の一切を知り尽くされての上に「我阿闍世の爲に決定心を持つ」と仰せられてゐる。

惟ふに如何に巨大な氷塊も灼熱する太陽の光熱に遭へば必ずとかされて了ふ。又如何に濁りに濁る河川の穢水も大海は音もなく容れて一味の潮に転ぜしめる。無窮の願力は罪業深重の身を重しと爲し給はず、無辺の佛智は散乱放逸の者をもおさめとられる。佛陀はすでに其の不思議な威德を成就せられてゐる、そして阿闍世王の出現をひたすら待ちに待たれてゐる。

以下次号

人生の歸趣と現實

白井成允

私は今日始めて一道会館に寄せて頂きました。この会館によつて佛様の御縁が多くの人々に傳つて行くことは慶ばしいことであります。三十年前に名古屋の学校に勤めました御縁から当地にはよく寄せて頂いてゐます。御縁と云ふのもは有難いと年齢を加へるにつれて愈々深く味つて居ります。今回もここで皆様方とお会ひして御縁を結ばせて頂きますことは誠に有難いことであります。

今日は「人生の歸趣と現実」と云ふことに就いて申上げませう。これは今回私が旅立つ前に思ひついた題でありますが、人生の歸趣などとは、人生を全く深く味つて来られた人にして始めて言へることで、私共の如き人生を深く味つて来なかつたものは人生の歸趣などと云ふことは出来ない。然し又顧れば、佛様が人生の歸趣を示されるので、私の考とか思想とかを申すのではありません。お釈迦様が教へて下さいました佛教にさう云ふことが審に教へられてゐるのであつて、私共はそれを生涯一日一日聞かされてゆく、それが私共の日日でありませう。今日の様な集りを御縁として少しでも佛の話を聞かせて頂く、かう云ふ意味でこれからお話することも意味があるのでせう

さて聞くと云ふことが浅いとか深いとかそれは機根に応じて色々な聞き方か出て参りませう。だから聞くといふことに一番注意せねばならぬことは、御取り次ぎして下さつた善知識の方々、凡夫の上にはつきりと取り次いで下さつた祖師の々方、その祖師様の教を明瞭に聞くことが大切なことであり

ます。私共は親鸞聖人にお教を頂くのであるが、その教を正しく味つて行くのが大切のやうであります。そしてまた聖人のみ教を正しく味はれ証された人に依つて間違ひなく教へられて行く、真実の道を開いて行くことが大切の様であります。

「人生の帰趣」とは、帰はかへり、趣はおもむく私共の五十年百年の生涯が一体どうなるのであらうか、それが私共に問題であります。釈尊の教に「勝れたる法を知らずして百年生きんよりは、勝れたる法を見て一日生きんは勝る」と仰せられてゐる。有耶無耶に生きてしまへば百年も醉生夢死で無駄に生きたことになる。念佛を申させて貰へば生きて来てよかつたといへるのであります。

今から三十年も前の思ひ出ですが、恩師島地大等先生の御次男が三つで亡くなられました。其の時、恩師の親友の菅瀬芳英師が悔みに来られました。床には蓮如上人の真筆で「如来所以興出世、唯説彌陀本願海」と書かれた大幅が掲げられてありました。菅瀬師はこれをじつと見ておいでになつて「ここに如来の世に出で給ふ所以は、ただ彌陀の本願海を説かんが爲なりと示されてある。それならあなた方が生れたのは何の爲であるか」と尋ねられた。突然のため何と答へてよいか私には分らなかつた。すると「釈迦牟尼佛は唯説彌陀本願海で、私達は唯聽彌陀本願海である、唯聽かんがためである。人間に生れて最も大切なことは彌陀の本願を聞くことである」と申されたのであります。それで私共は当時大学の研究室で学んでゐましたが、その研究の成果も彌陀の本願を聞かなければ所詮その意味がなくなつて了ふ、学問する根底を本願を聞くことによつて完うし得ることを知らせて貰つたのであります。前に述べました釈尊の教に「百年法を聞かずに生きるよりも、一日法を聞いて生きるに如かず」とありますのは、法を聞かないでは生涯が夢幻に化して了ふ。生涯が夢幻であることは佛教を聞かせて頂くことによつて始めて知らされて来るので、教を聞かなければ、この夢幻に執着して空しく人生を過すのであります。大正時代の大戦の時、成金が続出した。或人が戦争で俄に成金になつて御殿のやうな立派な家を建て、そこに住まうとした、ところが胃癌になつて、段々不治のことが知れるに随つて、切角建てても住めない位なら、この家を建てるために他人を無理に押しのけて不義理をしたが、誠に申訳がないと非常に煩悶して息を引きとつていつた。私達の生命が佛の教に遇はなければ此の人のやうになつて了ふのでせう。倫理の学問、哲学の学問も唯それだけであれば、今の御殿と同じになつて了ふのでありませうし、それだけで廃れて了ふのでせうが、それに永遠の意味を與へて下さることに佛の教があり永遠の悟りの道に生かされて来るところに佛の教がある、だから道をよく聞くことが大切なことであります

その道といふことは根本的にどういふことであらうか、佛教徒として釈迦牟尼佛の教を聞き、真宗の門徒として親鸞聖人の教を聞くことである。然しこれは始めから左様に限定するのではありません、種々な他の祖師や偉人の教を聞くのであるが、結局親鸞聖人の教に落着いて行くのであります。若

し聞かないと堕落して了ふ。鳥や獣とは違つて我々は人間の生きて行く意味を尋ねて行きます。何の爲に生れ、何の爲に生きるのであらうか、これを究めて行くところに人間的生命の道があるのであります。

斯うなりますと何の爲に我等は生きるのであるかといふ問題が起つて来るのであります。それについて親鸞聖人の奥方である恵信尼公の文書で彌女様への御手紙があります、その中に、聖人が九歳から二十九歳までの御修業はただ「生死出づべき道」を尋ねて行かれたとあります。この根本の精神「生死出づべき道」を明らかにすることが聖人の御一生の仕事であつたと知らされることであります。これは道元日蓮解脱等の高僧も同様で、鎌倉の一世紀の間は日本民族の精神史で燦爛たる光明を輝かした時代でありますが、この方々がいづれも「生死出づべき道」を根本問題としてゐられる。更にこの方々ばかりでなく釈尊からシナ・日本の祖師の皆がこれを求められてゐる、親鸞聖人一人の問題ではなかつたのであります。さてこの道が何処に解決せられるのであらうか、聖人は彌陀の本願にそれを見出されたのでありますが、我々は彌陀の本願を聞く前に、先づ「生死出づべき道」とは一体どういふことなのか、これを問題にせねばなりません。

生死とは、生れ死ぬることである、生れ更り死に変り流転して行くことであります。一刹那一刹那に新しいものが出て来て、又念々刻々に消えて行く生死もありませう。佛教で問題とするところはこの現世の生命のみでなく、果報として現実をあらはし出した過去のいのち、そしてまた現実が因となつて現ずべき未来の世界、この三世のいのちをどうして救つたらよいかといふのが佛陀の教であるやうであります。

善導大師の「自身は是れ現に罪悪生死の凡夫、曠劫より已来常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと深く信ず」との有名な御言葉は、恐らく佛教の生命観人生観でありませう。釈尊の教をそのまま聞き、自身に省みますとああいふことになるのでせう。罪深く悪重くさまよふ凡夫、凡夫とは貪欲・瞋恚・愚痴の浅間しい心、その心が死ぬるまでおこつて来るのが凡夫であると親鸞聖人は仰せられてゐるが、善導大師は、御自身の上にそれを見てをられる。大師の現実の自分を見てさう云はれるのであつて、その現実から押して、過去の自分のはたらきはすべて流転の業であつたに違ひない、煩悩に沈み、罪悪の浪に漂うて来たのである。その因果の必然の理によつて未来に出離の縁あることなしと諦かに知らされて来るのであります。歎異抄の「いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と同一でありませう。自分のいのちの現実の有様を照らされて、久遠劫来、尽未来際、罪悪生死の凡夫であることが知らされてくるのであります。そこに聖人は「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」と仰せられてゐますので、善導大師も亦「善導一人がためなりけり」と見られてゐたと思つて居たのでありますが、昨年盛岡に帰つて島地大等先生の御墓に参つた時、フト氣付かして貰ひまし

たのは一人がためと仰せられてありますが、その一人のなかにはその時代の同朋のいのちが皆攝められてゐるといふことであります。大師にして見ますれば、当時のシナの同朋、丁度唐の全盛時代でありますが、それにしましても現実の社会や国家には種々な人生の浅間しい事があつたに違ひありませぬ。これを大師は自身のいのちと離して考へられない、これはシナ民族が流転してゐる、それは皆大師の問題でよそごとではないと感じられてゐた。釈尊は流転と説かれますが、その御心の中にはインド民族やシナ民族や一切の有情の姿がこもつてゐたでありませう。釈尊の幼時、鳥が木の葉にゐた虫を喰んだのを御覧になつて、何故に生命あるものが殺し合はねば生きてゆかれぬのかと思はれて、蕭然と悲しまれました。これ等は平素私共のよく見る出来事でありますが、六・七歳の少年の頃にこれを明らかに見られたところに、佛の境地がこの少年の歎きから生れて来てをります。その釈尊の教を傳へ聞かれた善導大師が、人間の運命を憶ひ、民族の未来を想はれる時、はてしなく流転して行くその姿が一体何時になつたら清らかに安んずることであらうかと歎かれ、それがそのまま大師御自身の事として見てをられるやうであります。

「生死出づべき道」を釈尊を始め三国の祖師達が求めてゆかれましたが、自分が迷つてゐるといふことが、親・兄弟・姉妹・社会・国家・同朋を迷はしめてゐると頂いて行かれました。自分のいのちは自分一人のいのちではない、一人が迷ふとそれによつて人々を迷はして行くのであります。親鸞聖人が安らかでない時は、母上も安らかで居られない、自分の安らぎは亡き母の安らぎでありませう。聖人は源平の戰の中に身を隠して行かねばならぬ悲痛な父の運命を如何に安らかにして行けるであらうかといふことが聖人の問題になつたのでありませう。三世のいのち、あらゆる衆生のいのち、それらが皆一つ関係のいのちであるといふことが佛教によつて明らかにされればされるほど、自分の迷ひについて聖人は二十年間苦しい修行をせられたのでありませう。自分を中心として父母妻子・社会・国家を苦しめて行くことが佛法を学ぶことによつて解らせて頂くのであります。自分を清めることによつて国家社会が清められて行く、これが「生死出づべき道」の意味でありませう。

学生などがよく未来のこと、お浄土のことなどは問題でないと云ひますが、これは一面佛教を明らかに知らないことと、自分のいのちの意味を知らず、自分のいのちのみをいのちと心得違ひをしてゐるので、唯五欲のいのちのみを樂しまうとするのでせう。「俺を生んだのだから親は俺が享樂出来るやうにせねばならぬ」と云つて父を擲つた少年があつたと聞きます。これを聞くと悲しくなります、さう云ふことが悪いとざへ知らぬのでありませう。何だか怖ろしい世の中になつて来たと思はれます。かう云ふ調子では佛教の三世因果の道理がなかなか受け取られないでせう。本当に自分は如何なるものであるかを考へれば、そんな浅薄な考では落

付なけいと思ふのですが、ここで自分をよく考へて見たいと思ひます。私共はこの五尺の躰を我と思つてゐますが、その我とは一体何でありませうか。私達は祖先の血を受け継いで来たのでありますから、母親の乳、食物、日光空、氣を頂いて生きて来たのですから、俺が生きて来た、といふことが何処で言はれるのでせうか。

佛教では縁起といふことを教へられます。自分のいのち、心の働きは諸々の因縁によつて現れて来るのである。天地の御縁、人間の御縁、五尺の肉体がこれ等の因縁によつて五十年の生涯を生かせて頂いてゐるのであると知らされる時、先程の少年の言つたやうな浅薄なことは考へられないでせう。種々深い御縁を思ひますと御恩によつて生かされてゐることが解りますが、鳥獸はそれを自覺しないで過します、独り人間は自覺する心を持つて居ります。切角この心を持ちながら教によつて導びかれないと、迷妄に乱され、煩悩に惑うて心がひらかれないで流転して行くのであります。そしてはかない自分を中心とした現世の五欲のたのしみのみに生きようとしてゐる自分が教によつて知らされ、そのことが眞理に相応しないことを照らされて、眞理に転ぜしめて下さるのが佛の教であり、そこを聖人が究められて「本願に帰す」と教へて下さるのであります。

以下次号

御一代聞書抄

往生は一人のしのぎなり。一人一人佛法を信じて後生たすかる事なり。よそごとのやうに思ふこと、かつは我身をしらぬことなり

佛法は一人居て悦ぶ法なり。一人居てさへとうときに、まして二人寄り合はばいかほどありがたかるべき。

佛法者は法の威力にて成るなり。威力にてなくば成るべからず。

信心定得の人は、佛より言はしめられるが間、人が聞いて信をとるなり。

たうとむ人より、たうとがる人ぞたうとかりける。

聞光抄（秋・光の部）

清水清吉

猛威を逞うした激暑も、一陣の秋風に朝夕の冷しさを味ふ。まことに自然の理法には敵し難い。唯この寒を寒とし、暑を暑とし、自然の理法に順応するところに、真の冷しさがあるに違ひない。

さりながら、私の毎日の生活においては、これを離るること遙に遠い。遠きが故は、悩み、苦しみ、悶へる、そは、当然の帰結である。当然と知りつつも、なほそれより逃避しようとしてますます苦しむ。そして十重二十重に縛られて、なかなか苦しみから脱することが出来ぬ。

如来は、名号をもつて、この繋縛を断ち切つて、私をして自由の天地に躍動せしめんがために顕現せられたのだ。唯々有難い、私の生活を見つめれば見つめるほど唯々有難い。

○

自分を鞭打つてくれる人がなければ、楽だが心がふとらぬ。毎日念佛に鞭打たれてゐる自分は本当に仕合せ者だ。

「有難う御座います」と「申訳御座いません」とは離すことが出来ない。「有難う御座います」のみなれば恩に馴れ、「申訳御座いません」のみなれば向ふ様の御親切がすなほに受けとれぬ。

○

どんな環境によつても支配を受けぬと頑張つてゐる人がある。しかしかう言つてゐること自体が、実は環境に支配されてゐることではあるまいか。「私は周囲によつて支配されつつある私である、すこぶる弱い私である」としらしめられるそのことが、おのづから周囲に支配されぬ心境、即ちほんたうに力強い境地であるまいか。

真実のすがたに徹することはなかなかむつかしい。しかしながら徹し得ぬ私と、はつきり判らせて頂いた時に、それが即ち真実のすがたに徹した時ではあるまいか。

「知らざるを知らずとせよ、これ真に知れるなり、そは人智の絶頂である」と清沢満之先生が叫んで居られるが、これこそ、この辺の消息を物語るものと味はれる。

○

如来の大慈悲の味はれるのは、下根下劣の凡夫にのみ與へられる大きな特典である。わが身ながらわが身をどうすることも出来ず、泣いて泣いて泣き抜いた時、救ひの御声が胸にひびく、暗がわからずにどうして光が判り得よう。

いたずらに光をせんさくするより、わが身の暗さを見ることだ、わが身を暗と、はつきり氣付かして頂くそのことはみ教に育くまれた現れだ、救ひの躍動の賜だ。

○

ややもすれば相手を自分の型にはめようとする、恐ろしいことだ。ささやかながらも、同志の方々と語り合うて常にこれを恐れる。

私の姿は明日何を仕出かすかも計り知れない。かうした私の姿を見れば見る程危い。甚だ不遜な言ではあるが、常にお友達に申します。「若し萬一、私のやうな者をあてにして道を求めて居られる方があられたら、佛様とちき取引きをお願ひしたい」と。

私の醜態によつて、あなたの尊い求道の熱が冷くなるのがまことに申訳ない。唯ともどもに佛様の御前に額づくだけだ。

○

「私には角がない。三つ位なものだらう」などと思つてゐると、その角が鋭い三角形ー。

み光によつて、角の無数なるに氣付かせて頂くときに、なたのまどかなおすがたに攝めとらるるを想ふ。

「日毎に深められるは自分の醜さだ」と語りつつ、なほ且つ醜い生活をしてゐる自分が情ない。「何とかならなければならぬ」と思うてみたりもする。たが、何ともならない。唯お念佛様とともに顧づくより外に道がない。

○

どうしても悩みから逃れ得ぬ私、無明のきずなから離れ得ぬ私ではあるけれども、み光に照らさるるままに、いつの間にやら頑なの氷を解けさして頂くお働きが、この私の上に働いて下さるのに「いや、死ぬまでこの私の根性が直るものではない」と力みきつて、我慢我慢の城に閉ぢ籠り、そのみ光が折角私の上にお働き下さるのをはね返してゐる私を見出したときに、唯々浅はかな自分に泣くのみ。

篤信の方々の信仰体験の文なり、お話なりに接したとき、それをそのままに受け入れることが出来ず「そんな綺麗な世界がこの世の中にあらうか。それは表現がうまいのだ、いくら何でも、さうした苦境の立場にあるときに、そんな思ひになり得る筈がない。如来様が極悪深重とおつしやる、凡夫ぢやないか。そんなことになれるなら佛様のお救ひもいらぬのぢやないか」などと、ついとんでもない方向に理窟をつけてしまふ。

○

平生業成！　平素において心置きなくみ法を聞く、それが一旦緩急の場合において大偉神力の活躍を顕現する。

平素なるかな平素。さるを、逆境を待つて信を得んと思ふ人多し。知らずや、逆境においては、み法を聞く餘裕のわが心にあらざることを。

○

「急がば廻れ」といふことがある。これが本当に身について味はれるのは容易のことではない。私は何時も事に直面した時に「どうしたらさうした妙な心持が起きるだらうか、どうしたらそれを直すことが出来ようか」と、そればかりに苦労して、結局は疲れ果てて虻蜂とらずになる。

「そうだ私は三毒で出来てゐるものだつた。妄念より外に心のないのが、私であつたのだ」と氣付かせて頂くときに、何とした愚かしいことであらう、何かと云へば自分の妄念を、羽織についた塵ぐらいに考へて、叩けばすぐ落ちるやうに思ひ、それに沒頭しては疲れ果ててゐる身の愚かさよ、と全く情なくなる。

○

そのかみ、聖德太子が煩悶せられて、どうともすることが出来なくなられた時は、何時でも夢殿に二三日の參籠をせられて、救世觀音の前に端座せられて「世間虛仮、唯佛是真」と心が定められ、そこに湧然としてこみあぐる力をもつて、世事にあたられたと篠先生から御講話を拜聽させて頂き、いつしか目頭が熱くなつてゐた。

ほんたうにさうだ、やんごとなき太子様もやつぱり人の子であられた。私は幸にも、わが夢殿なるお念佛にたよらして頂き、しばしばつまづきながらも、また再び立ち上る力を與へられて日暮をさせて頂くことは実に有難いことだ。

○

判りきつたことがなかなか判らぬ。すべてを見るはわが目、わが目はこれ欲。欲から見る故に、真実のすがたを見得ぬ。真実が見得ないからものごとに躓く。躓くから苦しむ、と。唯これだけのことが仲々判らぬ。

いや判つてはゐるのだが、それは頭の上だけで、本当に欲から脱しきることが出来ないのだ。欲から脱し得ぬとすれば、苦しむより外に道がないことは当然の帰結と云はねばならぬ。

して見れば、私の道は、唯苦しむこと、その当然さを明瞭に見させて頂き、そこに苦しみを敢然と受けてゆく力を頂いて歩むより外に道がない。そは他なし、真如法性より現はれ給ふ大願力に乘ずるのみ。

○

自分の眼で自分の顏を見た例がない自分の顏は鏡によつて始めて知ることが出来る。もし鏡に映る自分の姿を疑ふならば、永久に自分の顏を知ることが出来ないのだ。

いかなる人でも絶対無限の佛に対するとき、そこに出て来る値は零である。自分の値を零としてすべての人に対する時、そこに出て来る答は、無限大の力である。

橋の脚は水の上に現れてゐるところばかりではない。水の底深く喰ひ入つてゐることを忘れ勝である。

菅瀨芳英師の叱り

師が舌癌のため大学病院に入院中、師の学園を出られた或る富める人が見舞に来られ、別れぎわに師を慰めようとて

「先生、御病氣もそのうちにはよくおなりでせう。今に春になつて花でも咲いたら私が自動車でお迎へに參ります、御一諸に上野の花でも眺めませう」

と言つて病室を去らうとされた時、師は俄に床の上に半ば身を起しながら

「待て、お前はな、そんな心でゐては、自動車で上野の花ぐらいは眺められようが、私と一緒に極樂の華は眺められないぞ」

と強く叱られたとの事である。その後師は癌のために遂に逝かれたのであつた。

※　※　※　※　※

光圓卿の逸話

ある親殺しの罪人があつた。裁判の結果死刑となつた。ところがその囚人が「自分の親を自分が殺すのが何故悪いのか」と言ひ張つて罪を認めなかつた。それを水戸光圓卿が聞かれ、死刑の期日を延ばさせて、其の囚人に学者や德者を面会させ、遂に三年目に、囚人が始めて親を殺したことの重罪であることに覺めるに及んで断罪を執行せしめた。その時水戸侯は「切角人間に生れながらも、さうした罪をさへ知らずに終らせては不憫である。せめて人間に生れたのだから人間の味だけは知らせてやりたかつた」と述懐されたさうである。

※　※　※　※　※

編集後記

二月の寒い日、名大文学部教室で宇井伯壽博士の談話会に出席しました。老博士は「寒山枯木」と昔からあだなを貰つて居られる由、上田教授から承つた。明治・大正・昭和にかけて老博士の印度哲学への行績は大きいものがあります。

「私は浜松の近くの曹洞宗の寺院に生れて今尚住職をして居りますが、今度の制度で三十町歩の寺の田地は失ひ、大きな伽藍は年と共に朽ちて行きます。私の力ではこれをどうすることも出来ません。唯今といたしましては極く僅かでも青年佛徒の方々に将来眞実の佛法を興して下さる様全力を注ぐ外はありませぬ。目下佛教は昔の廃佛棄釈に等しい環境にあります」との述懐でありました。

老博士の見解を誌して春なほ淺い誌者の方々の机上に送ります。「専修正行の繁昌は遺弟の念力より成ず」とありますが現今位、遺弟の念力の求められてやまぬ時はありません。

△「人生の帰趣と現実」は白井先生の御講話を名古屋の小笠原顯秀氏の筆寫下されたものであります。佛法は人生で一番大切なことを教へて下さる、そこ一つがひらかれなければ人生の全体が空虚になる、そこ一つがひらけることによつて無常の人生が永遠に莊厳せられて来る。さう言ふことを諄々とお説き下さいました。御味読願ひます。先生の御住所は広島縣坂局区内坂町横浜であります

△聞光抄は秋の部で時節に順じない様でありますが、清水凡秀居士の信味溢れる慈語を聞断するに忍びず次回も続けさせて頂きます。

説法に兎と馬と象が河を渡る話があります。兎は表面だけを泳いで渡るが、馬は時々脚を川底に下す、象は常に川底に脚をつけて渡るとあります。凡秀居士の信の歩みは象のやうに常に脚を地につけて渡つてゐられるのに驚くことであります。そして私共の脚の浮いてやまぬ姿を照し出されて恥ぢ入ることであります。

△「人類救済の曙光」は阿闍世王が佛陀に面接申す直前で次号にゆづりました。断片になりましてお読み難いことと思ひますが、阿闍世王の心の動きの中に、そのまま私の姿が寫し出されますので刻明に誌させて頂いてゐます。信ずる力もなく、念ずる力もない、知目とこしなへに閉じ、行足とこしなへに缺く、煩悩具足の身に、佛慈昭々として倦むことなく息む時なく、注ぎに注ぎ、照らしに照らして下さることであります。

★良書照会

歎異抄身読記　福島政雄先生著。定価一八〇円、送料二四円。発行所。京都市下京区油小路通六條南入。丁子屋書店。振替京都一四五〇番。

近代思想と信仰　福島政雄先生著。定価一四〇円、送料一六円。発行所。京都市堀川花屋町、百華苑。振替、京都二五七八八番。

昭和二十七年三月十日　印刷
昭和二十七年三月十五日　発行
毎月一回十五日発行

定価　一部金拾七円（郵税共）
半年金百円（郵税共）
一年金二百円（郵税共）

名古屋市南区瓢上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所

名古屋市南区瓢上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社

振替口座番号　名古屋一〇四七〇番

慈光第四巻第三号　昭和二十七年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可